特別報告

腸管出血性大腸菌 O-157を保菌するイエバエの出現とその問題点

安居院 宣昭・倉橋 弘・小林 睦生（予研・昆虫医科学部）

New finding of the house flies contaminated with EHEC O-157:H7 in Japan
and the beginning of studies on whether the house fly is a vector of O-157 or not
Agui, N., Kurahashi, H. and Kobayashi, M.

1953年に生活改善運動の一環として「ハエと力をなくす運動」が提唱された当時から20～30年前までは、ハエが消化器系伝染病の機械的伝播者であることは一般的にも当たり前の事柄として受け止められていた。ところが生活衛生と環境の向上・整備、医療の充実等による疾病構造変化のなかで、「日本では伝染病は制圧されたのだ」と考える状況が生まれ、ハエは病原体の運び屋であると言う認識も同時に薄れてきた。この度のハエと O-157問題はこのような状況下で起こった。ある新聞報道では O-157保有ハエの確認は食材の流通にのみ目が行きがちだった調査研究の盲点を突いたと表現した

平成8年5月岡山県における集団発生に端を発した O-157食中毒は同年秋までには散発、集団発生を含めて全都道府県に広がりを見るに至った。国や地方自治体の関係機関は O-157菌の感染経路や発症の機構について早急に徹底究明を求めたが、未だ十分な解決は得られていない。さらに、10月には佐賀県において O-157患者発生施設周辺で採取されたイエバエが O-157を保菌する事実が確認された。予研昆虫医科学部としては、厚生省 O-157関連ホットライン機関、当該県からの依頼による現地調査等、このハエ問題に当初から深く関わりを持っていく中で、保菌バエ問題はひとつの県の地域的問題ではなく、全国的問題として捉えた調査研究が緊急に必要と考えた。12月には厚生省は「O-157等新興感染症研究事業」を補正予算で緊急に事業化するなかでハエ問題を重く見て、「ハエ類による腸管出血性大腸菌伝播に関する総合研究」の研究課題で予研昆虫医科学部が調査・研究を推進することを急遽決定した。この研究課題の実施には、全国規模での地方衛生研究所、大学および関連機関に所属する衛生昆虫等担当の専門家の研究協力が必須なこと、さらに、ハエ類の O-157保菌・伝播能力を知るための基礎研究や、衛生動物学、細菌学、害虫防除学、公衆衛生・疫学、獣医科学等の専門家よりなる総合的な議論も同時に計画されている。

O-157感染のハエ介在説は現段階ではまだ想定の域を出ていない。それを実証的に見定めるための調査・研究が早急に求められている。そして、この問題への取組みには内在している様々な問題すなわち発生源対策、ハエ駆除の困難性、行政所管問題等の対応と解決が求められよう。

研究データの蓄積がない現状では、具体的な研究結果の報告はまだできないが、昨年の10月以降に行った O-157集団食中毒発生地点の現地予備調査について紹介する。